

音楽のよさや楽しさを味わえる授業づくりを目指して

—鑑賞における表現活動を伴った実践の工夫—

石巻市立北上中学校 中澤 麻里

1 研究主題について

本校の生徒は、音楽への関心・意欲は高いものの、鑑賞においては苦手意識を持っている生徒が多い。令和4年4月の第2学年を対象にした実態調査アンケートでは、11名中8名が「音楽の授業が好き」と回答した。その理由に、「歌うことが好き」「合唱の表現をみんなで考えることが好き」と挙げている。一方、鑑賞については半数の生徒が苦手と回答した。その理由の多くは、「思ったことを文章にまとめること」「音楽の特徴を見付けられないこと」などであり、授業づくりの課題が大きく影響していたと考えられる。音楽の特徴を感じ取ったり、気付いたりするためには、生徒一人一人が音楽を味わう必要があり、そのための指導過程や学習活動が求められる。

そこで、これらの授業改善を行うとともに、鑑賞の授業に表現活動を取り入れる工夫を講じることで、生徒自身が音楽の構造や特徴に気が付き、音楽のよさや楽しさを実感できる授業づくりを目指した。

2 研究の内容と方法

授業づくりに関わる課題を受け、研究主題及び副題を設定した。主題の「音楽のよさや楽しさを味わえる授業」に関しては、中学校学習指導要領音楽科の鑑賞領域の内容「④音楽の鑑賞における批評」を中心とし、曲想と音楽の構造、曲想と曲が作られた背景など、根拠を持って批評することが求められている。音楽の特徴から見いだした根拠を基に、他者と批評し合いながら音楽活動を展開していくことが音楽を味わうことにつながっていくものと考えた。副題の「表現活動を伴った実践の工夫」に関しては、本校生徒の実態を受け、旋律や構成などを自分の中に落とし込むことが必要であり、そのために鑑賞と表現の一体化を図りながら実感を伴った鑑賞の授業を目指すものとして設定した。この研究主題に迫るため、以下の視点を設定した。

(1) 視点1「鑑賞して感じたことを伝え合うための指導の工夫」

- ・授業の展開や題材計画の構成を実態に応じて見直し、生徒が根拠を持って批評できるようにしていく。
- ・ワークシートの作成や板書をする際に、生徒に提示する学習課題や感想を書く際のポイントを明確に示す。

(2) 視点2「表現活動を伴った実践の工夫」

- ・表現活動を取り入れ、実際に歌ったり演奏したりすることで音楽を身体に落とし込んでいく。

- ・一人では気付けなかった点や視点を広げさせるために、個人ではなくグループによる話し合いや表現活動も行っていく。

なお、本研究の有効性を検証するために、2学年の生徒を対象に、授業での感想の記述内容やアンケートから変容を見取る。また、鑑賞をして感じたことを言葉で表現できないことで鑑賞への意欲が低くなっていることが実態調査で明らかになっているため、その手立ても研究の中で講じていく。

3 I期における授業実践と考察

(1) 授業実践I

題材名「ソナタ形式と曲想の変化に注目して、交響曲のよさを味わおう」(教育芸術社 中学生の音楽2・3年上 交響曲第5番 ハ短調)

3時間扱いの2時間目を本時とし、動機の繰り返しや変化、音楽を形づくっている要素に気が付き、それらが曲想とどのように関連しているかについて、考えや感じたことを表現できることを目標とする。交響曲のよさを味わわせるために、第1時ではオーケストラや楽器の特徴と音色についての理解、第2時ではソナタ形式の特徴の理解、第3時では交響曲第5番の全体像をつかませる。という授業の流れで構成した。

① 聴き比べる活動を設定することにより、曲想の違いを捉えさせる。【視点1】

曲想と音楽の要素の関わりについて、感じ取らせる部分を明確に示し、聴き比べを行った。対照的な旋律が特徴的である第1主題と第2主題の聴き比べを行い、曲想の違いを捉えさせた。

② 自分がイメージした「再現部」を、実際に演奏する。【視点2】

曲の提示部から展開部まで曲を鑑賞後、再現部を抜かした状態で、コーダ(終結部)を聴かせた。その後、再現部が、提示部の第1主題をどのように変化させて演奏されるか、イメージをさせた。また、生徒一人一人に打楽器を準備し、実際に演奏をさせた。表現活動を取り入れることで、音楽の特徴や構成などを自分の中に落とし込ませ、ソナタ形式を理解させるとともに、作曲家の様々な思いや意図が講じられていることに気付かせることをねらいとした活動である。

4 II 期に向けて



図1 再現部をイメージして楽器を演奏している様子

③ ワークシートの構成を工夫する。【視点1】

生徒の多くは感想を書いたり、文章で表現したりすることに苦手意識を感じているため、書く際のポイントを提示して、ねらいを明確にした。また、学習の見通しを持たせ、本時の学習が次時につながる活動であることを意識させるために、ワークシートを第2時、第3時を通して使用できるように作成した。

(2) 考察

聴き比べの活動を行ったことで、第1主題は「暗い」「激しい」、第2主題は「明るい」「ゆるやか」などと曲想を捉え、再現部のイメージを考える学習への導入としては効果的であった。

また、題材全体を通して、第1時で学習したオーケストラや楽器の音色や特徴について十分に理解ができていたため、第2時、第3時でも楽器のことに触れながら感想を書いている生徒が多かった。これまでの交響曲第5番の授業では、ベートーヴェンの人生に偏った感想が多く、今回のような感想が生徒から出てきたことは題材計画の構成を工夫した成果だと言える。4月に行ったアンケートで鑑賞が苦手な理由を「楽器が分からないから」と挙げていた生徒がいたが、教材や題材に応じて何を学ばせるか、教師が押さえて指導することで、生徒の変容が見られることを実感した。

楽器を用いてイメージを考えさせる活動（図1）では、演奏において速さを遅めに設定したり、間を十分にとって音を出したりと、工夫が見られた。どうしてそのように演奏したかを聞くと、「コーダ（終結部）」が盛り上がり終わるから、再現部はいったん静かになるのではないかと答え、曲想と音楽の構造との関わりを理解している様子が見えた。その後、再現部を聴かせたときに、自分の考えたイメージと実際の演奏が似ていたか、興味を持って聴こうとする姿勢があった。

一方で、感想を発表し合う場面では、教師と生徒との個別の対話が多くなってしまったと感じる。生徒同士でお互いに気付いたことや感じたことを話し合う場の設定や、興味深い発言や発表に対し全体で共有し合う教師側の働き掛けが足りなかった。

【視点1】について

・題材全体の学習計画を生徒にも伝えたことで、第1時から興味を持って学習に取り組ませることができたため、II期でも同様に実態に応じた題材計画を行う。

・書くことが苦手な生徒や何を書いたらよいか分からないという生徒の実態を受け、文章の修正や授業後にも書き加えることができるGoogle Formsへの入力を検討していく。また、Google Formsに入力した考えを共有することで、文章にまとめることが苦手な生徒への参考となるように、ICTを効果的に活用していく。

【視点2】について

・生徒同士の対話を通して、曲想と音楽の構造や特徴について、気付いたり深めたりしていけるよう、グループでの活動を取り入れる。

・I期では、表現活動を取り入れたことにより、楽曲についてより理解することができ、書くことが苦手な生徒も感想を書いたり、興味を持って聴いたりする様子が見られ、大きな成果を得た。一方で、楽曲全体を把握して音楽の構成について触れながら感想を書いたり、曲想と楽器の音色を関連付けて感想を書いたりした生徒は少数であった。そのため、表現活動を取り入れるねらいや場面を明確にし、II期では【視点2】を重視した授業展開を行っていく。

5 II 期における授業実践と考察

(1) 授業実践II

題材名「歌舞伎の特徴を感じ取り、そのよさや魅力を味わおう」（教育芸術社 中学生の音楽2・3年上 歌舞伎「勧進帳」）

4時間扱いの2時間目を本時とし、歌唱することを通して長唄の発声や旋律、リズムなどの特徴に気付き、それらの関わりから歌舞伎における長唄の効果や役割について考えることを目標とした。第1時では、歌舞伎の歴史や長唄で使われる楽器、「勧進帳」のあらすじについて理解させ、本時となる第2時では、長唄を実際に歌唱して特徴を捉える、第3時では、勧進帳における音楽の効果に気付かせ、第4時では、改めて勧進帳を鑑賞して歌舞伎の魅力を味わえるように授業の流れを構成した。

① 実際に長唄を歌唱し、発表し合う。【視点2】

歌舞伎の音楽の特徴について、生徒自身が気付く、深めさせるために、長唄の発声や旋律、リズムなどに焦点を当て、歌舞伎のよさを味わわせられるよう授業を展開した。最初に、長唄を聴かせた後、個人で練習する時間をとり、実際に歌唱させた。その後、3人ほどの小グループ（図2）を編成し、歌唱したことで長唄について気付いた特徴を互いに共有しながら、更に練習する時間をとった。そして、グループごとに発表し合う場面（図3）を設定し、他のグ

ループとの歌い方の違いなどから新たな気づきを得られるようにした。

② ICTを活用する場面を設定する。

自分の聴きたい部分を繰り返し聴いたり、演奏者の姿勢や口元を見たりして、長唄の特徴をより感じ取らせるために、一人一人にタブレット端末を準備した。模範演奏の動画を個人練習やグループ活動の際に活用し（図2）、自分たちで練習できるように場を設定した。

また、Ⅰ期の課題から【視点1】を踏まえた取組として、Google Formsを活用した。長唄の特徴について、多様な気づきに触れさせたい場面では、Google Formsで互いの考えを共有させた。そして、まとめの感想を書く場面では、個人でじっくりと考える時間をとり、ワークシートに記述させるなど、使い分けを行った。



図2 タブレットを活用したグループ練習の様子



図3 グループごとの発表の様子

(2) 考察

本時の終結で、最初と比較して、歌舞伎に対して見方がどのように変わったかをワークシートに記入させたところ、「現代の音楽とは違い、とても特徴的だったが興味が湧いた」や「歌う前は音楽に意味はないと思っていたけど、歌ってみると歌詞にも意味があることに気付いた」「役者に目が行きがちだったが、音楽を担当している人たちも大切な役割を担っていることが分かった」などの感想が上がった。その理由として、実際に長唄を歌ったことにより、普段自分たちが歌っている発声との違いに気付いたからだと考えられる。また、歌詞の内容を把握したことで、舞台場面と合致しているところにも気付くことができた。そして、発声との違いに気付いた生徒については、楽譜の記載にも触れ、西洋音楽との違

いを考えさせる場を教師側で働き掛けたことで、日本の伝統音楽について、より理解が深まっていた。しかし本時の導入で、長唄の楽器について触れすぎたことで、実際に生徒が気付いた特徴の視点が、楽器に偏ってしまう場面もあった。導入のねらいを明確にし、唄そのものに焦点があたるような授業の展開が必要だった。

個人練習やグループ練習（図2）でタブレットを活用して繰り返し聴いたり、何度も練習したりすることができ、表現活動に前向きに取り組む様子が見られた。また、手元に視聴覚教材があることで、範唱者の細かな口の動きや姿勢なども注意深く観察させることができた。

しかし、前時に長唄の楽器について復習をしたことで、長唄の特徴が楽器に偏ってしまった。唄の特徴に焦点があたるように提示する必要があった。

授業後に行った事後検討会では、「事前アンケートでは、歌舞伎に興味がない生徒がほとんどだったが、どの生徒も意欲的に学習に取り組んでいた」「グループごとの発表があったからこそ、自分のグループと比較したり、更に興味を持って聴こうとしたりして気づきが生まれていた」などの成果と、「生徒のつぶやきを拾って全体に問い返す場面が多くあったが、生徒同士のやり取りがもっと見られると良いのではないか」「グループ練習の前に、特徴についてもっと掘り下げてから練習させると更に効果的だったのでないか」などの課題が挙げられた。

6 Ⅱ期の成果と課題（○：成果●：課題）

○ Ⅰ期の成果と課題を踏まえ、題材全体の授業構成や生徒の実態に応じた手立てを工夫して研究を進めることができた。表1の感想は、3時間目に勧進帳における長唄の効果について学習した際の生徒の感想である。

表1 生徒の感想①

役者を引き立てたり、物語の雰囲気を引き出したりするために音楽があると思います。長唄が大きい時は、役者は動きだけで表現して唄を目立たせようとしているように見えました。物語を盛り上げる時は鼓を叩いたりして勢いよく演奏されていたけれど、役者を引き立てる時やしっとりとした雰囲気の時は、三味線がメインで静かに演奏されていることに気が付きました。

表1の感想から、1時間目に学習した楽器について、2時間目に学習した長唄の「唄」の部分について触れながら音楽の効果を捉えていることが分かる。

○ Google Formsを活用したことにより、書くことを苦手としている生徒は、周りの考えを参考にしながら感想を書いたり、新たな気づきを得て感想を書き加えたりする様子が見られた。また、2時間目の終結で入力した感想を3時間目の導入で一

7 1年間の総括

覧にして見せることで、生徒の感想を用いながら授業を進めることができた。

- 歌舞伎は音楽以外にも、舞踊や演技、様々な要素が関連して成り立つ芸術であるが題材全体を通して、音楽を主軸として全体計画を立てて進めることができた。まとめの鑑賞文からも、全生徒が音楽と関連付けて歌舞伎の魅力を味わったことがうかがえた。生徒の鑑賞文は次のとおりである。

表2 生徒の感想②

歌舞伎はいろいろな要素が合わさってできたすばらしいものと分かりました。音楽は、舞踊や役者の演技を引き立てて、物語の雰囲気をつくるとても大切な役割がありました。鼓や三味線などの楽器の音と、独特な歌い方はとても心地よく、聴き入ってしまいました。見得や六方、隈取などの歌舞伎特有の演技や化粧は、当時の芸術の工夫なのかと思うと、とても面白いと思いました。歌舞伎は、隅から隅まで楽しめるすばらしいジャンルだと思いました。

- 実際に歌唱したことで、歌舞伎に対する興味・関心が高まり、舞踊や演技、衣装や化粧などの音楽以外の要素についても熱心に鑑賞する様子が見られた。表2の生徒の感想にあるように、音楽・舞踊・演技それぞれのよさについて触れながら、「歌舞伎の魅力は総合芸術だから味わえるもの」と鑑賞文を書いている生徒が多くいた。
- 教師が話す場面が多く、生徒が活動する時間が少なくなってしまった。つぶやきを基にして、教師が補足説明で済ませることも必要であった。
- 全体を通して、生徒は感想を書けるようになったが、音色やリズム、旋律や速度などの音楽を形づくっている要素に関連付けた内容の記述をしている生徒は少数であった。鑑賞の授業のみならず、普段から音楽を形づくっている要素に触れ、音楽を知覚する力を身に付けさせていく必要がある。

＜Ⅱ期全体を振り返って＞

授業前と後に行った歌舞伎に対する意識調査では、「歌舞伎に興味はありますか」に、「ある」「どちらかと言えばある」と回答した生徒は1名だったのに対し、9名に増加した。このように回答した理由として、「楽器と歌の関係性が見えてきたら歌舞伎が面白いと思った」「長唄がその場の雰囲気や様子を表現しているところが好き」「今回の授業を受けて、本物の歌舞伎を見てみたいと思った」などが挙げられた。このことから、表現活動を取り入れたことで、勧進帳における音楽の効果を深く学ぶことができたようだった。また、歌舞伎に対する親近感が沸き、生徒の歌舞伎への関心が高まったと感じた。

なお、Ⅱ期では、【視点1】【視点2】それぞれの手立てとしてICTを活用する場面を設定した。そのことが効果的に作用したため、上述したような生徒の変容が見られたのではないかと考える。

(1) 研究の成果について

4月と11月に行ったアンケート結果は次のとおりである。

「鑑賞の授業は好きですか」の項目では、「好き」と回答した生徒が4月は5名だったのに対し、11月には9名に増加した。その理由として、「難しいと感じるけど、前よりも感想が書けるようになったと思うから」「これまで知らなかった楽器の名前や音楽のジャンルを知ることが楽しいと思ったから」など、生徒自身も4月からの変容を実感として捉えていることが分かった。

本学級の生徒は、全員が「歌唱が好き」と回答するほど、表現活動に大変意欲的である。その生徒の実態を生かして、鑑賞の授業に表現活動を取り入れたことが、このような変容をもたらしたのではないかと考える。また、Ⅱ期での歌舞伎における鑑賞文の内容や分量からは感じたことを伝えようとする気持ちをくみ取ることができる。教師から与えられた知識ではなく、自分自身で気付いた特徴だからこそ、深く感じ取り、言葉でまとめようとする姿勢が見られたのではないかと考える。

(2) 今後の取組について

表現活動を伴った学習活動を取り入れることで、鑑賞への意欲の高まりや、音楽を深く味わうことにつながった。今後は更に生徒の思考を広げ、深めていくために以下の3点について考えていきたい。

- ・題材全体や一単位時間で指導事項と共通事項を適切に位置付け、目標の設定と振り返りの内容を工夫していきたい。そのために、毎時間の導入場面を大切にし、学習のねらいと学習活動を確認することで、見通しを持たせながら学習できるようにしていきたい。

- ・ICTを効果的に取り入れ、生徒が意欲的に学習に向かう場の設定をしていきたい。生徒の実態や学習のねらいに応じて、全体で鑑賞させる場面と個人でタブレットを活用して鑑賞させる場の設定やGoogle Forms等の有効な活用場面について検討していきたい。

- ・生徒の考えや思いを音や音楽、言葉によるコミュニケーションを図りながら引き出していけるよう、学習形態や教師の働き掛けを工夫していきたい。

【図表等の許諾について】

図1～3は授業実践の授業の様子である。表1～2は生徒が記入した感想の一部である。研究の目的のみに使用すること、感想については氏名を伏せて掲載することとし、生徒及び生徒の保護者、所属校の校長から使用許諾を得た。